

前畑憲子教授記念号に寄せて

前畑憲子先生は、1996年4月に立教大学経済学部に着任されて以来、16年間にわたって経済原論Aの授業を担当されました。経済原論Aは、経済学部のカリキュラムにおける基幹科目であるとともに、本学部の伝統を担う特色ある科目であり、多数の学生に経済学の基礎理論を高い水準で、かつ分かりやすく講義するという困難な課題が課せられています。先生は、講義ノート「『図解 社会経済学』を読む」を作成・活用されたことにみられるように、この課題に精力的に取り組まれました。また先生は、講義の理解が十分でない学生に対しても、オフィス・アワーなどを利用して丁寧な指導を続けられました。さらに、講義ノートの作成にあたって歴代のティーチング・アシスタント（TA）を務めた大学院学生を組織して指導することなどを通して、大学院教育においても大きな成果をあげてられました。

こうした教育活動の背景をなす前畑先生の研究の中心は『資本論』の研究ですが、それは大きく2つの分野に分けることができます。ひとつは『資本論』第2部第3篇の「再生産論」を中心とする研究であり、もうひとつは『資本論』第3部第3篇の「利潤率の傾向的低下法則」を中心とする研究です。これらは全体として、マルクス恐慌論の研究として括ることができます。前者すなわち「再生産論」の研究は、富塚良三氏の「均衡蓄積率」論及びレーニンの「第 部門の自立的発展」論に対する批判、マルクスが再生産表式で問題とした課題を離れてエレガントな表式を作成することに注力するような研究に対する批判、膨大な論争が繰り広げられた「拡大再生産の出發表式における困難」なる問題の意味の解明などを通して、恐慌論における「再生産論」の意義と限界を明らかにしたものです。後者すなわち「利潤率の傾向的低下法則」の研究は、『資本論』第3部に関するマルクスの第1草稿（新MEGA第2部、第4巻）を詳細に検討することを通して、学界におけるこの法則についての多数の誤解を正し、マルクスの産業循環と恐慌の分析の基軸となるこの法則の全体像と積極的な内容を解明したものです。

前畑先生のこれらの一連の研究は、故久留間鮫造博士の『マルクス経済学レキシコン』第6巻～第9巻の成果を引き継ぎ、それをマルクス草稿の研究という新たな次元で発展させたものであり、学界における重要な貢献をなすものです。また、これらの研究によってマルクスの恐慌分析を現代資本主義の分析に活かす新たな可能性が切り拓かれました。

前畑先生の研究姿勢は、いわゆる論争にも既存の権威のシェーマにも振り回されることなく、現実分析のために古典そのものと素直かつ真摯に向かい合うというものです。それはまた、先

生の師である故久留間博士の姿勢でもありました。先生のこうした『資本論』研究における真摯な姿勢に魅せられて、多くの大学院学生が先生のもとで学び、研究者として育っていききました。

さらに、前畑先生は大学運営の場でも、本学部の経済学科長を務められただけでなく、本学の入学センター副センター長を務められるなど、誠実に仕事をされました。

このように、前畑先生は、教育・研究・大学運営を通して本学及び経済学部的发展に多大な貢献をなされました。

本学部一同、前畑先生が今後とも健康で過ごされ、研究をはじめとするさまざまな分野で活躍されることを願っております。

2013年3月

経済学部長 池上 岳彦